

# 輸血用血液製剤でHBV（B型肝炎ウイルス）感染が疑われた事例（7月9日報告）について

## 1 経緯

平成16年7月9日夕方、日本赤十字社から輸血（人赤血球濃厚液、人血小板濃厚液及び新鮮凍結血漿）によるHBV感染の疑い事例で患者が死亡した症例の報告があった。

## 2 事例

10歳未満の男児。原疾患は急性リンパ性白血病。平成15年9月16日～平成16年7月5日の間に、輸血を計19回（人赤血球濃厚液1単位を10袋分、人血小板濃厚液10単位を8袋分及び新鮮凍結血漿2単位を1袋分）受ける。

輸血前の血液検査（平成15年9月16日）ではHBs抗原検査（B型肝炎ウイルスの検査）は陰性であったが、平成16年7月6日に実施したHBs抗原検査は陽性、肝機能検査（GOT、GPT）は大幅に上昇した数値を示す。また、7月6日に新鮮凍結血漿による血漿交換（2単位製剤（約160mL）を7本使用）を行っていた。

患者は劇症肝炎による急性肝不全で7月7日に死亡。

## 3 状況

### (1) 輸血された血液製剤について

○ 当該患者には、19人の供血者から採血された赤血球製剤、血小板製剤及び新鮮凍結血漿を輸血。

○ 当該製剤に関わる血漿は、人赤血球濃厚液2単位1本及び原料血漿19本。  
なお、赤血球製剤については、既に医療機関へ供給していたが、医療機関へは当該情報を提供済み。

### (2) 19人の供血者について

19人の供血者全員がその後献血しており、検査は陰性であった。（7月21日現在）。

### (3) 供血者の個別NATの試験結果

供血者19人の保管検体について、個別NATを実施したところ、全て陰性であった。

### (4) 患者の保管検体の個別NAT及びHBs抗原の試験結果

医療機関に保管されていた患者検体のうち、12検体すべての個別NAT及び検査可能な6検体のHBs抗原検査はすべて陰性。

## 4 今後の対応（案）

輸血とHBV感染（劇症肝炎発症を含む。）との因果関係はないものと考えられる。